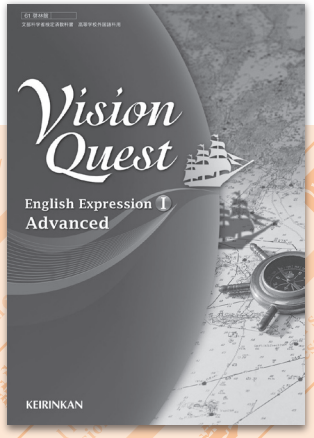
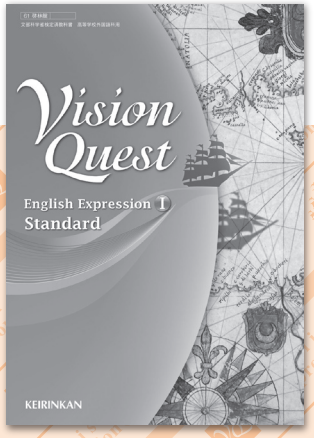
KEIRINKAN

Vision Quest
English Expression I

[英語表現Ⅰ 授業実践記録] Part1





新科目を教科書・ワーク・参考書・確認問題集でスムーズに展開 p.2-4
上宮高等学校（大阪）　飛松宏幸

「英語」で「表現」を目指して活動をグレードアップ p.5-7
三重県立宇治山田高等学校　皿屋禎久

Vision Quest を利用した言語活動の実践例
―バランスのとれた「受信力」と「発信力」の育成を目指して― p.8-10
長崎県立長崎北陽台高等学校　伊藤敦司

WE ARE 地球人！
―教室の英語を外の世界につなげるために！― p.11-13
宇都宮短期大学附属高等学校（栃木）　熊倉誠一

新学習指導要領における英文法指導と英語運用能力向上
―知識重視の文法から知識と運用のバランスの取れた文法へ― p.14-16
大阪府立夕陽丘高等学校　永井秀夫

新科目を教科書・ワーク・参考書・確認問題集でスムーズに展開

上宮高等学校（大阪）
飛松 宏幸

使用教科書	Vision Quest English Expression Ⅰ Standard
単位数	3単位（国公立大学コース）
使用副教材	ワークブック, Vision Quest 総合英語
使用デジタル教材・機器	

1. はじめに

本校では英語表現Ⅰを週３時間かけて行う。英語表現は新設の科目で，授業展開のイメージがつかみにくかったため，よりスムーズに運用できるように，教科書に完全リンクしている問題集，参考書，確認問題集がそろっていた『Vision Quest 英語表現Ⅰ』を採用した。

本校では１年次より主に私立大学進学を目指すコースや国公立大学進学を目指すコース等に分かれている。本年度は国公立大学進学を目指す生徒たちのコースを担当しているため，将来的に生徒たちがよりスムーズに英作文演習に移行できることを念頭に置き，授業を行っている。

2. 授業に際して

中学時，英語に苦手意識を持っていた生徒の中には，『Vision Quest 英語表現Ⅰ』のL.2で取り扱っている文の要素および文型が全くと言っていいほど理解できていない者も多い。特に文法事項の解説を理解してもらうためにも，L.2の内容を徹底的に解説し,小テストを実施し,満点合格を義務付けた。また，各学期の1時間目や準動詞，関係詞など文構造に関する事項を学習する際には必ず復習し，理解の徹底を図りたい。

3. 授業の進め方

授業中指名される生徒たちに不公平感を持たせないため，席順で指名し，発問する。その際，既習の英単語や文法事項の中で定着していないと思われるものや予習が不十分であると思われる事項や単語があれば，「レポート」を課し，理解できていることを確認した上で学期末の平常点に算入する。

また，一定の水準以上の答えをした生徒や，クラス全体への発問に対して挙手をして答えた生徒たちには「パス」を与え，指名された際に答えなくてもよいシステムを取っている。

文法学習や言語活動においては「語彙」が大きな位置を占めることを生徒たちに説明し，新出単語だけでなく，既習語においても文脈に当てはまる訳語をイメージしたり,意味を理解できない語･熟語については，授業前の予習において，辞書等での確認を義務付けている。また，生徒たちが予習してきた内容は必ず授業中に確認を行い，活用するようにし，決して予習内容が無駄にならないように努めている。

生徒たちをなるべく萎縮させないため不正解の場合でも「違います」「間違っています」等の表現は避け，「どうしてそう考えたの」「なぜその答えになったの」と問いかけ，生徒の学ぶ姿勢を大切にしながら正解を引き出すように心がけている。

4. 実践報告

（ア）Model Conversation

本文中で注意すべき語や運用範囲の広い表現等を解説した後，コーラスリーディング。その後，Function で取り扱われている事項について，説明を加える。必要に応じて追加の例文等を板書し，理解の定着を図る。

Listening Task は音声を聞かせ，生徒たちに発問した後，答え合わせをし，Pronunciation で扱われている母音と子音の音素としての特徴や発音する際の留意点，アクセント等で特に留意しなければならない語を述べ，生徒に発音させた後，実際に音声を聞かせ，答え合わせを行う。最後にもう一度聞かせ，自分の耳で正解を確認させる。

（イ）Grammar

例文の解説に入る前に，中学校の既習範囲を含

めたその課で取り扱う内容を板書し，解説を加える。『Vision Quest 総合英語』に掲載されている図表があっても，より深い理解の定着を図るため，Lesson ごと，Grammar ごとではなく，なるべく全体像をつかみやすいような図（時制+完了形，比較等）や表（助動詞，準動詞等）を板書し，解説を加える。また，本校では Standard 版を使用しているため，『Vision Quest 総合英語』の発展編に述べられている事項もこの時に解説し，その文法事項の全体像を把握させ，今後の入試問題演習でも活かせるまで，理解させるように心がけている。

（ウ）Exercises

個々の生徒を指名し，解答する部分だけでなく正解を組み込んだ文を発音させた後，日本語訳が付いていない文については和訳をさせる。誤訳や不正解の場合はどこが間違っているのか，なぜ正解が出なかったのかを確認させ，理解の定着を図るのは当然であるが，同時に 1 年生には少々日本語に訳しにくい表現等はクラス全体に発問し，出てきた回答が正解なのか，そうでないのか，そうでないとしたらどこに問題点が含まれているのか，意見を出させ，考えさせる。Listening の一環として，解答はなるべく板書せず，生徒たちに聞き取らせる。難解すぎると思われたり，質問が出た時に英文を板書する。

（エ）Use it

主に家庭学習の課題として取り扱う。Exercises の解答・解説を行ったその次の授業の終了時に提出させ，平常点に算入する。スペルミスの指摘や理解できていない事項の確認も含め，添削指導を行った後，返却する。

（オ）Expressing

STEP1 では音声教材を聞かせ，正解を確認するだけではなく，発話時の音の変化や，イントネーションの変化による微妙なニュアンスの違い等も指摘し，留意させるように心がけている。

教科書の指示どおりペアワークかグループワークを選択しているが，L.1 では学年はじめのクラス内での友人関係の構築の一環として，教室内を自由に移動させて，複数の相手とペアワークをさせたり，L.2 や L.3 においては，同じ人物や旅先に興味があるものを探させ，グループを作らせ，それぞれのグループにクラス内で短時間，英語で発表をさせた。特に L.2 ではなぜその事項に興味・関心があるのかについても発表させた。クラス全体に対して発表させる際には発音矯正や文法・表現の誤りなどの訂正をしすぎないように留意し，本活動での目標である生徒たちの発表のリズムを妨げたり，自信を喪失させることがないように心がけた。また，学力差や内容の難易度に鑑み，英語での質疑応答だけではなく，短時間ではあるが日本語での質疑を許す時間を取り，発表している生徒たちの発信が一方的に終わることのないように心がけた。L.4 の STEP3 では特に現在完了形の完了・結果と単なる過去形の違いや過去完了形の時制の意味がイメージできるように特に留意し，指導した。

（カ）Activity

基本的に授業時に行う。文法や表現の正確さよりも，発話させること，個々の生徒たちが実際に英語を用いて output することに重点を置いているため，細かいところまで矯正しすぎないように心がけるのは他の活動と同じである。また，クイズ形式のペアワーク等では正解が出るまで英語でヒントを出すことを許しているため，ともすれば出題する生徒たちの方が多くの英語を使うことになり，言語活動の幅が広がった。

（キ）『ワークブック』

正解を組み込んだフルセンテンスを答えさせ，日本文の付けられていない文の日本語訳をさせるのは Exercises と同様である。なお最後の語句を補う問題は，黒板にフルセンテンスを書く生徒を指名しておき，次の授業時に解答・解説を行う。英作文の解答は多種多様であることを理解させるため，正解が出た場合も，そうでない場合もできる限り多くの表現を示し，その後に質疑の時間を設けることを心がけている。

（ク）『Vision Quest 総合英語』（STEP2・発展編）

教科書は Standard 版を採択し，『Vision Quest 総合英語』も授業時に使用する。教科書で学習した内容及び Grammar についても学習前にこれまで学んだ事項を『Vision Quest 総合英語』でもう一度復習，確認させる。特に，模擬試験や将来の入試受験に備え，過去の出題例とその解答に至る道筋や考え方も示すようにしている。

（ケ）小テスト

Expressing が終了したその次の授業時に Grammar の例文を書かせている。この場合は，Expressing や Activity の際の運用重視の姿勢ではなく，読み上げられた日本語訳に対応する英文を 1 文まるごと正確に答案用紙に再現することを義務付けている。正確な英文を暗記し，表現の方法を増やしていくことで，英作文対策だけではなく，長文読解の対策にもなると信じている。3 問出題し，2 点合格。不合格者は例文を暗記し，任意の時間に再テストを受験。再テストは満点合格としている。再テスト期限は特に設けていないが，テスト結果及び再テストの結果は学期末の平常点に算入する。

（コ）『基本例文集＋確認問題集』
（『Vision Quest 総合英語』付属の別冊）

解答が巻末に掲載されているため，授業の中では扱わない。しかし，より多くの問題を解き，語彙や表現を理解・定着させたいという観点から，定期考査の範囲に組み込み，自学自習用の教材として使用している。また，基本例文も定期考査の範囲に組み込む。

（サ）Show & Tell

Practice を家庭学習の課題とし，提出させた後，返却。自分で推敲させ，さらに同じ興味を持つ生徒どうしでグループを作らせ，さらに推敲させ，1 クラス2～3グループに絞って，全体に発表させた。質疑の時間を設けたり，誤りや論理の展開の指摘に留意することも Expressing の事項と同じである。特に p.17 と p.18 の Show & Tell では写真が掲載されている映画「Harry Potter」の登場人物のフレーズを引用し，Potter, what, was など生徒たちにもなじみの深い語を選んで，アメリカ式の発音とイギリス式の発音が異なることや，それに付随してその他の地域にも独特の発音やイントネーションがあることも紹介した。

（シ）Linking Words 及び Paragraph

コミュニケーション英語 I の教材や学習内容は，模擬試験，将来の大学入試等の長文問題に当たる際，重要な位置を占めること，既習・未習に関わらず，その語句自体の意味を知っているだけでは不十分であり，それらの機能と特徴まで理解しておくことが重要であることを伝えた。また,授業展開の上からも,p.73 の Paragraph も連続して扱った。解説時には同時に等位接続詞の働きと注意点にも触れ，文構造や単語単位の並列構造なども扱った。p.52 の③や p.74 の②③の解答・解説の際の留意点は Expressing や Activity の活動時と同じである。

5. おわりに

何よりも生徒たちには英語とは遠い存在ではなく，身近に使いこなすべきものであるという実感を持ってもらうことを目指し，日々授業に臨んでいる。また，英語で発話する際には，英語に関する知識だけでなく，様々な事項に関する幅広い知識，関心を持つことが必要であり，英語の発話とは何よりも自分自身の興味，知識の集積ということと，口調や発話の仕方だけでなく，目線や表情といった Non-verbal な要素もコミュニケーションの重要な一部分であるということを実感してもらいたいと思っている。たった一つの表現方法だけではなく，TPOに応じた口調や表現方法を用いてコミュニケーションをとる相手とお互いに心地よい距離感（立場，親しさや人間関係）をつかむことが重要であるということを理解してもらえる授業を心がけていきたい。

英語が使えることを目指すのは当然であるが，本校では生徒たちのほぼ全員が進学を志している現状を踏まえ，文法事項の定着が大前提であり，英語の言語活動はあくまでも，そのためのものであると思っている。ともすれば，教員も生徒たちも言語活動に時間と労力がかかりすぎる傾向にあることが，大きな課題である。文法事項の定着と言語活動，これらのバランスを考えながら，授業の主役である生徒たちが楽しく学び，「英語がわかる」と言ってもらえるような授業をこれからも目指していきたい。

飛松 宏幸
とびまつ ひろゆき

大阪市生まれ。京都外国語大学外国語学部英米語学科卒業。現在，私立上宮高等学校英語科主任。趣味は旅行，料理，読書。

「英語」で「表現」を目指して活動をグレードアップ

三重県立宇治山田高等学校
皿屋 禎久

使用教科書	Vision Quest English Expression I Standard
単位数	2単位
使用副教材	ワークブック，音声CDなど
使用デジタル教材・機器	iPad, iPod touch, プロジェクター, ワイヤレススピーカー

1. はじめに

特別なことを授業の中でやっているわけではないが，私の日々の授業が先生方の実践と重なり，お互いの授業改善の一助となれば幸いである。担当している1年次の取り組みについてレポートしたい。

また，授業を振り返ることで見えてきたことがある。それは，今後の授業の方針である。この点についても触れさせていただければと思う。

2. どうして『Vision Quest』であったのか

本校では旧教育課程において1年次には，英語Ⅰと O.C. Ⅰを設定してきた。どちらの科目において Grammar を中心に扱うべきなのか気になっていた。

新課程となり，「英語表現」において Grammar の活動が視野に入っている『Vision Quest』に出会い「これだ!」という思いで採用することになった。この教科書ならば，Grammar もコミュニケーション活動としての ALT とのティーム・ティーチングも，カリキュラムどおりに実施できると考えたからである。ずっと気になっていたことが解消された思いであった。昨年度末には本校勤務の ALT にも教科書を渡しておき，「4月からこの教科書でティーム・ティーチングの授業をやるので，前もって lesson plan を立てておいてほしい」とお願いしておいた（年度当初にはやることが多くあり，実際には5月の連休が終わってからティーム・ティーチングが始まった。ティーム・ティーチングについては次項で述べたいと思う）。

3. 日々の授業

教科書を使ったコミュニケーション活動の部分（ティーム・ティーチング）は ALT が中心になって進めている。教科書をもとにした指導案の作成，そして必要ならばハンドアウトの作成，授業での準備物は ALT の分担としている。授業も ALT の主導である。この時間はほぼ all English になる。生徒がわからない語彙については板書して，私もできるだけ日本語を発しないようにする。ダイアログの部分を使ったスキットの提示，各レッスンの末尾の Expressing の活動がメインで，ALT がそれ以外のコミュニケーション活動を準備してくれている。毎回の授業のはじめには自分のお気に入りのものをクラスに紹介する Show & Tell や音声の練習等を行う。余談だが，本校の ALT はいたく Expressing の活動を気に入っている。曰く，読む，聞く，書く，話すという活動を1つの話題で繰り返して取り組んでいるところがいいそうだ。

さて，私が授業でやる部分は Grammar に関するパートが主になっている。

生徒には予習として Exercises に取り組むことを課している。そのためにも説明部分はざっとでも読んでおくように指示している。生徒の取り組みを見ていると，Exercises をやっている生徒，やっていない生徒半々といった印象である。生徒には「教科書には書き込まない。ノートにやる。教科書に書き込んであると復習にならない。問題を見たときに答えが見えていると，わかった気になるからダメだ」と繰り返し伝えているのだが，それでも書き込みを改められない生徒がいる。

私が授業で特に心がけていることは，「簡素な説明」，「音読・暗唱」，「演習」である。

（1）簡素な説明

簡素な説明というのが個人的には授業を左右する

ポイントになっているようである。どうしてもしゃべりすぎてしまい，自分が持っている Grammar の知識をひけらかすことになると，結果，生徒に「わからない」と言わしめてしまうことになる。もっとさらりとした説明を目指して，説明は文法参考書に譲ってしまうことはできないかと考えている。「現在完了のこの部分は参考書のこのページに書いてあります。今から1分で読みなさい。1分で読めない人は自宅で読み返しておくように」と指示を出してみたことがある。このように説明を簡素化，短時間化することで音読・暗唱と演習の時間を確保することを今後の目標としたいと考えている。

（2）音読と暗唱

授業中の「音読活動」に重点を置いて取り組みだして2年が過ぎた。やってみると生徒が生き生きと声を出す姿が見られ，「音読，楽しい」という生徒が卒業生の中にも現れた。この感想にはこちらの授業に対するモチベーションが大きく高められた。4月から担当している生徒たちにまずもって伝えたこと。それは「授業中に声を出すこと」を恥ずかしがらないということである。

本校では「英語表現」の授業は少人数展開をしている関係で担当している講座には2，3クラスの生徒が混在している。

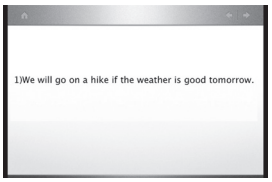
毎日一緒に教室で過ごすことがない生徒が集まると声の大きさもたいして期待できないものだが，授業では声を出すもの，との刷り込みに成功したようで，よい感じで授業を進めることができている。

「英語表現」の授業では，主に教科書に取り上げられている例文の音読，暗唱に取り組んでいる。すべての例文を音読，暗唱させる時間の余裕がないので，特に暗唱させておきたい例文をピックアップしている。また，暗唱するだけでは生徒のモチベーションも上がらないので，「暗唱するといいことがある」と思わせることがポイントだと考えている。打算的でも暗唱した英文をテストに出題したり，暗唱した英文を少しアレンジして英作文させたりすることで，「覚える」➡「できる」➡「使える」と思わせる仕掛けを仕込んでおく。

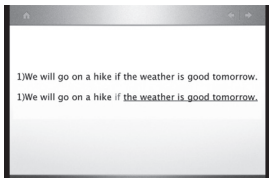
（3）演習

演習時間の確保を目指して，授業に keynote を持ち込むことがある。プレゼンソフトを使う方が，基本的には同じ説明を講座数繰り返すよりも，生産的であると考えており，黒板だけでない方が授業にも変化が生まれるのではと考えてのことである。プレゼンソフトは，黒板に書いた英文を隠したり見せたりすることで，文法項目を説明するには有効と思う。

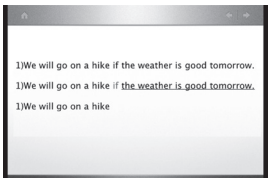
資料①は5月末から6月にかけて時制～完了形を学習するときの keynote である。副詞節を説明するのに作ってみた。iPad を操作している私の隣で生徒がうん，うんとうなずく姿が印象的であった。①-1で例文を提示し，①-2で接続詞とそれ以降の節を意識させ，①-3で接続詞以降の節を隠し，文が成立するかを発問する。①-4でこの文章は副詞節を含んでいるかを確認するというものである。



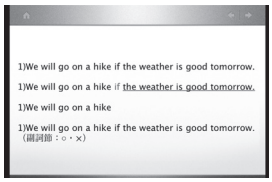
資料①-1：英文を提示する。（タップでこれ以降の英文が現れる）



資料①-2：接続詞と接続詞以降の節を意識させる。



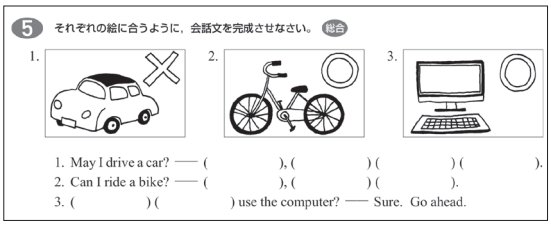
資料①-3：接続詞以降をカットする。



資料①-4：英文が解釈できるかで副詞節を見分ける。

また，演習は基本的に教科書の Exercises 及びワークブックの問題に取り組ませている。Exercises においては今後の取り組ませ方をさらに工夫したいと考えている。ワークブックの問題には本校の生徒には難しいと感じられる語句が使用されている文もあるが，そのようなときは授業中にピックアップして，この問題とこの問題は今やりましょう，とすぐに取り組ませている。また，今後のコミュニケーション活動のためにぜひ押さえておきたいものは少々難しくてもできるだけ扱うようにしている。たとえば，ワークブック（standard）Lesson 5 助動詞1⑤（p.25，下図参照）のような問題は生徒にはどう

取り組んでいいのかわかりづらかったようだが，個人的にはおもしろいと感じた。また，演習としてはややパターンに偏りがあるとか，取り組ませたい問題の数に不安があるときには**資料②**のような補助プリントを宿題として取り組ませたりしている。


5 それぞれの絵に合うように，会話文を完成させなさい。 総合

1. May I drive a car? —— (　　), (　　) (　　) (　　).
2. Can I ride a bike? —— (　　), (　　) (　　).
3. (　　) (　　) use the computer? —— Sure. Go ahead.

Vision Quest Standard ワークブック p.25

1. 日本語の意味を表すように，(　)内に適語を入れなさい。

1) 彼女は火曜日からずっと学校を休んでいます。
She (　　) (　　) absent from school since Tuesday.

2) 私はエジプトを３回旅行したことがあります。
I've (　　) in Egypt three times.

3) 彼らはカナダへ行ってしまった(今はここにはいない)。
They (　　) (　　) to Canada.

資料②

4. 授業の流れの確認と今後の方針

3.（1）～（3）で述べた授業の内容は実際に展開すると，以下のようになる。

教科書の左側の説明，参考書のリファレンス，いくつかの例文の暗唱，問題演習。

１学期の半ばまではこれで自分としては満足していたが，実際にいくつかテストを経てみると生徒の学習内容の定着について不十分と思われる点が見られた。これをどう改善していくのかと袋小路に迷い込んでしまった気分でいた。ぼんやりと出口が見えてきたのはある先生の実践に気づきをいただいたことであった。英語表現の授業で私は Exercises が解けることに重点を置きすぎていたことに気がついた。問題が解けるようにと思って説明を長くして，わかった気にさせていたのである。暗唱英文も例文をそのまま何度か繰り返していただけであった。暗唱活動後の活動の視点をその先生からいただいた。

具体的には暗唱した英文を再生できるかということだと自分では整理している。

１学期末テスト後の授業で，生徒たちに今後の授業はこうしたいと伝えながら，暗唱例文を加工した作業の取り組みを披露してみた。暗唱した例文は**資料③**で，これらを再生させようとしたプリントが**資料④**である。今回は生徒の「やったらできる」感を大切にして，そのまま参考書の例文を使った。また，暗唱の途中で少しだけ英文をアレンジするオーラルプレゼンテーションを入れたりしてみた（例：母は化学の先生です）。今後はこの活動にリスニング活動を組み込むことを考えている。試行錯誤しながら授業準備をしているのに，不思議にワクワクしてくる。

＜「英語表現」の授業だから，「英語」を使って「表現」できることを目標にしていこう。これは生徒の多くが目標としている「受験」に反しないことだ＞。やっとこう考えられるようになった。

暗唱英文

私の父は英語が好きです。
My father likes English.

彼は英語の先生です。
He is an English teacher.

昔々ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんは山へ、おばあさんは川へ行きました。
Once upon a time, there lived an old man and his wife. One day, the old man went to the mountain, and his wife went to the river.

資料③

私の父は英語が好きです。
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

彼は英語の先生です。
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料④

皿屋 禎久
さらや　としひさ

1964 年三重県熊野市生まれ。愛知県立大学文学部英文科（当時）卒業。1988 年より三重県に奉職。趣味としていたバンド活動を現在休止中。自転車（ロードレーサー）に乗る時間をいかに捻出するかが現在の課題。

Vision Questを利用した言語活動の実践例

―バランスのとれた「受信力」と「発信力」の育成を目指して―

長崎県立 長崎北陽台高等学校
伊藤 敦司

使用教科書	Vision Quest English Expression Ⅰ Advanced
単位数	2単位
使用副教材	音声CD，Vision Quest 総合英語など
使用デジタル教材・機器	PC など

1．はじめに

今年４月から指導を開始した新教育課程における英語の指導内容は，英語４技能のうちの1つだけを使う力ではなく，複数の技能を統合的に活用する実践的なコミュニケーション能力の育成を重視している。そして，「コミュニケーション英語」が４技能の**統合**を重視しているのに対し，「英語表現」は「話す」「書く」といった**発信能力の育成**を重視している。

高校１年生で現在使用している啓林館の『Vision Quest English Expression Ⅰ Advanced』は，他の教科書と比べて，新教育課程への対応として，次の３点で工夫がみられる。

（1）自己表現の機会が数多く設けられている。
（2）「話すこと」と「書くこと」が有機的につながる工夫がなされている。
（3）紙面が視覚的に理解しやすく，生徒の興味を引きやすい。

また各 Lesson が以下の構成になっており，従来の教科書よりも，学んだ表現を即座に使ってみる活動を充実させることができる。

- Model Conversation
- Listening Task
- Pronunciation
- Function
- Grammar
- Exercises
- Use it
- Expressing

2．授業における実践例①「Model Conversationを活用した演習」

『Vision Quest English Expression Ⅰ Advanced』を使用することで，生徒の英語４技能を比較的容易に養成することができる。

各レッスンのはじめが Model Conversation という形でそれぞれのトピックに関連したモデル会話文になっているので，私は次のような取り組みを行い，「話す」技能を養成したいと考えている。

（例）Lesson1 “Introductions”

My name is **Tanaka Kaito**.
“Nice to meet you.”
(Dialogue)
K1: You're **Emily**, aren't you? I think you made a speech at the entrance ceremony.
E1: Yes, that's right.
K2: My name is **Tanaka Kaito**. Nice to meet you.
E2: Hi, **Kaito**. Nice to meet you.
K3: I'm glad we are in the same class.
E3: Me, too, **Kaito**. By the way, which club are you going to join?
K4: Well, I think I'll visit **the *kyudo* club** this afternoon.
E4: Sorry, what was that again?
K5: **The *kyudo* club**. It's **the Japanese archery club**.
E5: Oh, that sounds interesting. Take me with you !

① Kaito のパートを教師，Emily のパートを各々生徒が担当して chorus reading をする。
②各々のパートを教師，生徒が入れ替わる。
③生徒どうしで pair work をする。
④上記 dialogue において，**太字**で書かれた部分を，生徒の名前，実際に所属する部活動に置き換えて，ペアで練習する。
⑤完全に台本を覚えてから，各ペアは教師の前で発表を行う。その際に，お互いアイコンタクトにも留意し，自然な会話になるように心がける。

○普段の授業で留意していること

- 私は，音読（Reading）なしに英語力の飛躍的な

向上はないと考えている。そのため，週2回の「英語表現」の授業では，必ず，授業の導入のアクティビティで各レッスンにおいて上記の活動を行っている。

- 高校１年生にとって，文法（Grammar）の学習は必須である。『Vision Quest English Expression I Advanced』には，学習ページが26ある。中学の復習から，徐々に発展的なものへ配列されているので，授業で演習にも時間を割き，確実な理解を促している。
- Exercises の Use it は，既に学習した文法項目を利用しながら，身近な話題を題材にして，生徒に英作文演習を行っている。
- 巻末にある Activity1 ～ 12 では，各自が紹介するトピックを決め，発表できるようになっている。

　たとえば，Lesson1 “Profile” は1. name から 9. favorite book / writer までの9項目をペアでお互いに質問し合うことで，相手のプロフィールを英語で書き込みができるようになっているのが興味深い。私は，前もって生徒に3枚の記入用紙を渡しておき，最低3回は相手の情報を英語で聞き出すことを求めた。

3. 授業における実践例②「Show&Tell の実践」

『Vision Quest English Expression I Advanced』の p15，16 には，自分の紹介する内容について考えを整理する方法（ブレーン・ストーミング）が具体的に紹介してある。考えを整理するためにまず図を描いて，その情報を取捨選択し，話す順番に番号をつける。

1年生対象の「英語表現」の授業で，その方法を使って「My Pet」をテーマにして，実際に生徒に取り組ませてみた。

（1）brain storming

（例 1）のような専用のシートを作り，各自の考えをまとめさせる。

まずは飼っているペットについて5項目程度のキーワードを，（例 1）のように書き込ませる。その際，話す順番に番号をつけておく。

（例 1）

（2）原稿を書く

- 全体の構成は [intro] → [body] → [conclusion] の形で書くように指導する。

（3）原稿の校正後，全体で発表する

（例 2）

[intro] 最低5行は書く！

指導のポイント
行数や内容について指示することもある。

Hello, everyone.
My name is ○○ . Nice to meet you.
I would like to talk about my pet.
Look at this picture.
（ペットの写真を見せる）
She is very cute, isn't she?

[body] 最低7行は書く！

This is my pet cat, Tama.
I named her after the character from a popular manga *Sazaesan*.
She is a white cat with brown spots on his face.
I got her from my aunt two years ago.
She is so small and pretty.
She is so easily scared.
She likes to play with a ball and also likes to eat sardine.
She is a source of comfort to me.

[conclusion] 最低2行は書く！

Please come to my house and see her.
Thank you for listening.

4. 授業における実践例③「500語の英語エッセイを書く」

次に，「書く技能」と「必要情報を収集する技能」を養成したいと考えて，今年の夏課題として以下の内容に取り組ませた。

2020 年の夏季オリンピックに立候補している３都市の企画書を読み取り，それぞれの長所・短所を吟味した上で，各自が3都市から1つを選び，各班内の他のメンバーと議論をする。

Q：Which city is the most appropriate for Games of the XXX Ⅱ OLYMPIC?

2020年の夏季オリンピック候補地として，次の3都市のうち，どこが一番適切か?
（その都市を選んだ理由を，最低3つは記すこと!）

- イスタンブール（トルコ）
- 東京（日本）
- マドリード（スペイン）

*なお，次のA～Gのグループに1冊ずつ企画書を渡すので，自由に利用してよい。

企画書「REPORT OF THE 2020 EVALUATION COMMISSION」は以下のサイトから，各自で閲覧することも可能である。

http://www.olympic.org/Documents/Host_city_Elections/2020_Evaluation_Commission_report.pdf

*各班のメンバーどうしで必ず事前に話し合い，以下のような書式で統一すること。

GROUP（　）
Name（　　）
Our group thinks that　（　　）
ISTANBUL / TOKYO / MADRID
is the most appropriate for the 2020 OLYMPIC GAMES.
Because .....

GROUP（A～Gの7班）

A 出席番号	1～　6	E 出席番号	24～29
B	7～12	F	30～35
C	13～18	G	36～40
D	19～23		

なお，自分たちの班が選んだ都市が9月7日のIOC総会において正式に選ばれた場合は，2学期の「英語表現」の平常点を考慮する。（本稿は9月7日以前に執筆）

5. おわりに

新課程の初年度である今年の1年生に「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」を指導して，約3か月が経過した。本校では「コミュニケーション英語Ⅰ」を週に4単位，「英語表現Ⅰ」を週に2単位で指導している。

私は「英語表現Ⅰ」が,英語の4技能における中で，特にSpeakingとWritingの力をつけることができる科目と考えて，現在指導している。

例えば，『Vision Quest English Expression I Advanced』の巻末にあるActivity 4～6，9，10は,ペアワークを利用したInformation gap（英語を介したお互いの問答によって情報不足を埋めていくもの）の活動である。このワークシートは，旧課程においては「オーラルコミュニケーション」の教科書にもなく，教師がワークシートを自作する場合がほとんどであった。この活動は，英語の4技能が全て網羅され，かつ生徒が考えながら答えを導き出していくものとして，有効であり，各レッスンの終了後に行うことにしている。

このように，新課程用の教科書の内容は，将来の様々な場面において，英語を介して様々なことを行うことを想定して作成されていることを強く感じる。

日本の英語教育を揶揄する時に使われる例のお決まりのフレーズ「日本人は中学・高校で6年間も英語を学習しているのに…」と言われることを今回は何としても阻止したいという著者や編集者の強い意志と情熱を感じるのは私だけであろうか。

「実践的な英語教育の必要性」というグローバル化の流れを一段と色濃く変化を反映させて作成された各社の新課程用の教科書を，私たち教師がどう利用していくかに，これからの英語教育の未来が託されていると重い責任を感じる。

最近，大学入試制度やカリキュラム等について，ようやく将来に向けた変化の兆しが見られるのは喜ばしいことだ。

今は，現場の一教師として常に生徒の「語彙や文法知識の理解」と「その知識の実践的な活用」，「受信力」と「発信力」をバランスよく養成していくことに全力を注ぎたいと考えている。

伊藤 敦司
いとう　あつし

長崎県大村市生まれ。高知大学人文学部文学科英文学専修卒業。長崎県立松浦高等学校，対馬高等学校を経て現在，長崎北陽台高等学校教諭。第1学年主任。今年が教職20年目。趣味はスポーツ観戦。

WE ARE 地球人！

―教室の英語を外の世界につなげるために！―

宇都宮短期大学附属高等学校（栃木）
熊倉 誠一

使用教科書	Vision Quest English Expression Ⅰ Standard
単位数	2単位（応用文理コース）
使用副教材	音声CD，Vision Quest 総合英語
使用デジタル教材・機器	iPad，電子黒板，プロジェクター

1. はじめに

文部科学省が「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」の戦略構想を打ち出し，その実践に注目が集まるなか，本校での英語教育の実践記録を紹介したいと思う。

「今までの英語教育がなぜ実践的でないのか」（その主な原因）

- 生徒自身のモチベーションの不足。
（英語を知る楽しさを理解していない）
- 英語を生活及び視野を豊かにするツールとしてではなく，苦しい受験教科としてとらえている。
- 授業が面白くないので，興味が持てない。
- 英語は苦手だと思ってしまう。

など，様々な理由が考えられる。確かに訳読中心の授業では興味が持てないし，受け身の姿勢になってしまう。また，せっかく学んだ知識が教室の中だけのものとなってしまい，外の世界とつながらない状況である。このような状況を打破し，生徒の目を何とか外へ，そして世界へ向けさせたいと思い，一教室から世界を語るのはおこがましいが，次のようなことに留意している。

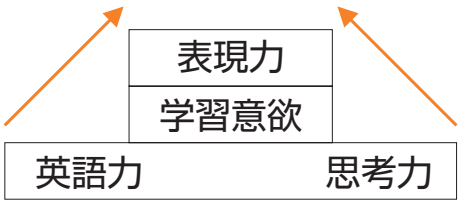
2. 実践的コミュニケーション能力育成について

（1）生徒のモチベーションの高揚
［英語を使う機会の拡充］

- 英語弁論大会，ディベート大会などへの積極的な参加や留学生との交流活動の推進。
- 生徒の海外研修への参加促進。
- ティーム・ティーチングの積極的導入。
- 視覚教材の活用。
- 英語検定，TOEICなどへの受検の促進。
- 大学入試センター試験対策として，定期試験でリスニングテストを導入。
- 高大連携講座を実施し，国際理解・言語学などの講義を行う。
- 海外修学旅行の実施。
- 英語合宿の実施。（ブリティッシュ・ヒルズなどの施設利用）

（2）教育内容の改善

- 新学習指導要領の推進（4技能の統合的かつ総合的な育成を図るコミュニケーション科目，論理的に表現する能力の向上を図る表現科目，会話する能力の向上を図る英語会話に再編された）。
学習指導要領の提示する思考，判断，表現，習得，活用等の関係を図式化すると，次のようになる。



英語の授業では，英語力を磨くことで表現力を身につける左側からのアプローチが一般的であり，今後もそうあり続けるだろう。しかし，言語活動を知的活動と感性・情緒を表現する活動であると位置づける新学習指導要領によって，思考力から表現力にアプローチする右側ルートの意義が強調されている（確かに，英語ディベートでは，英語力よりも思考力が大切である）。いずれの場合も学習意欲は欠かせない。

- 生徒の意欲・習熟の程度に応じた授業展開または補充授業の実施。
- コミュニケーション力の育成には，聞き手側の「相手を肯定的に受け入れる」という姿勢を持たせることも重要である（発表者は受け止められる安心を知り，相手を信じるようになり，意欲的になる）。
- 英語教員の資質向上及び指導体制の充実（本校では英語科教員にTOEIC受検を義務付けている）。

3. 指導実践例（英語表現Ⅰ）

使用教科書　：Vision Quest English Expression Ⅰ Standard

使用教材　：音声ＣＤ，デジタル教材 iPad，電子黒板，プロジェクター

教授用参考資料：Team-Teaching 用指導書（指導書別冊③）

授業内容（最初の授業で Classroom English のプリントを配布し，少しでも英語環境をつくるよう配慮する）

Classroom English

As a rule I use only English in this class. I don't allow you to use Japanese during the lesson. The following sentences will help you have the lesson. Please don't be afraid of making mistakes and enjoy an English world.

1.When you have a question;
I have a question. / May I ask you a question?

2. When you don't understand;
Pardon? / Could you speak more slowly?

3.When you don't know the meaning;
What does something mean?

4.When you don't know the pronunciation;
How do you pronounce something ?

a. 教員側からのアプローチ

- デジタル教材を活用し，音声のみならず視覚的効果を高める。その会話がかわされている状況を把握させる（音声のみでなく，映像も与えることにより導入がしやすく効果が大きい）。

iPad とプロジェクター使用

電子黒板使用

- ティーム・ティーチングでは，教員どうしの Model Conversation を実施。その後，会話文法･表現･熟語などの説明をALTが英語で説明をする。
- JTE は生徒の理解度に応じて，特に文法について日本語で説明と解説を行う。
- 生徒どうしのペアワークでその定着を図り，発表させる。
- Q&A を ALT が行う。JTE は生徒の反応を確認し，必要に応じて説明を英語で加える。
- Variation や Option を行う（JTE は生徒の状況を見て，補足説明を英語でする）。

- Task と Expressing を実施。特に Expressing では時間を与え，その後ペアワークを行い，発表させる（聞き手側の態度を事前に十分に指導しておく）。
- Expressing での発表後，生徒側から英語で質問する（できるだけ生徒間の会話も英語を使わせることにより，英語の環境作りを意識的に行う。そして時折海外ニュース等を DVD で見せ，多少なりとも学習がいかされていることを実感させる。特に留学生がいる場合は交流の機会を数多く持ち，英語がコミュニケーションのツールとして利用できることも実感させる）。

少しずつ，教室から外の世界につながることを肌で感じさせ，意識を世界に向けさせ，日本人としてというよりむしろ地球人としてグローバルビューを持たせられるよう今後とも英語教員一丸となって指導にあたる所存である。

備考）文法を学ぶ意義も大切にしたい。

文法とはつまりその言語体系において語句と語句とをつなげる法則であるが，生徒は文法というと，顔をしかめる。しかし，言葉を使うときというのは，いつも相手と関わりたいという心を持つとき。相手に自分について，わかってもらいたいと思うとき。そういうときに言語を使う。言語は表現行為のひとつである。言葉は思うままに表現する絵画のような主体性だけによってなされる表現行為ではない。言葉には社会的ルールがある。そのルールにかなう形式に従わなければ自分の気持ちや事柄を相手に表現することはできない。聞き手はルールに従って表現の理解に努める。英語においても，自分の感情・思考を的確に発信し，相手の言葉を正確に受信するために，文法の知識を身につけ，技能を磨くことはたいへん意義あることだと思う。

熊倉 誠一
くまくら せいいち

大阪府茨木市生まれ。獨協大学外国語学部英語学科卒業。現在宇都宮短期大学附属高等学校英語科教諭。

新学習指導要領における英文法指導と英語運用能力向上
―知識重視の文法から知識と運用のバランスの取れた文法へ―

大阪府立夕陽丘高等学校
永井 秀夫

使用教科書	Vision Quest English Expression Ⅰ Advanced（普通科）
単位数	2単位
使用副教材	ワークブック，音声 CD，Vision Quest 総合英語など
使用デジタル教材・機器	iPad，プロジェクター，CD プレイヤー

1. 最初に

（1）過去2年

大阪府立夕陽丘高等学校は，平成 23 年度から3年間，府の事業である「使える英語プロジェクト」の研究指定を受けた24校のうちの1校である。平成25年度からの新学習指導要領に対応できるように，2年間先行実施の形で英語の授業改善に取り組み，生徒の学力向上につながるように努力を重ねてきた。授業改善に関しては，英語で英語を教えることを意識し，生徒に少しでも多く英語を使わせるように心がけた。学力に関しては，校内定期考査のみならず，外部業者を活用した学力診断テスト・外部模試および検定試験の数値向上に努めた。「プロジェクト事業」によるネイティブ講師増員（1名）,iPad 導入，外部講師による放課後の特設レッスン，国内活動支援予算，教材費等が生徒の英語運用能力の向上および学力伸張に貢献した。

（2）新学習指導要領元年

「使える英語プロジェクト事業」2年間の先行実施期間を経て，本年より新学習指導要領のもとで授業が始まった。コミュニケーション英語Ⅰの教科書は『ELEMENT』を使用し，週4時間ある。英語表現Ⅰの教科書は『Vision Quest English Expression Ⅰ Advanced』を使用しており，週2時間である。英語表現Ⅰは本年度は普通科7クラスのみで，来年度は音楽科1クラスが『Vision Quest』を使用することになっている。ネイティブ講師はコミュニケーション英語Ⅰで基本週1回入るが，英語表現Ⅰの内容もコミュニケーション英語Ⅰのティーム・ティーチングの時間で行っている。英語表現は2人の日本人教師が担当している。

2.『Vision Quest』活用例

過去2年間の一番の悩みの種が英文法指導と英語運用能力の向上のバランスをいかに上手に取るかであった。『Vision Quest』がこの問題に明快に答えてくれた。もう一人の担当者にもはっきり伝えた。「英語運用能力向上に特別なことを用意する必要はない。教科書どおりに進めば，英語運用能力が定着する」。『Vision Quest』の周辺教材として，ワークブックと『Vision Quest 総合英語』を活用している。

（1）Model Conversation

従来の文法偏重の教科書と違い，新学習指導要領を意識した部分である。教師用の CD を全体で聞かせた後，ロールプレイを実施する。CD に続いて話者の一方を静聴し，当該話者の会話部分を発声させる。役を交代し，同じことを繰り返す。全員が発声するコーラスリーディングである。教師も生徒の発声を促す趣旨で，生徒と一緒に発声する。生徒は喜んでこの学習活動に参加する。声がよく出ているのがその証拠である。運用能力に欠かせないリスニング練習になること，および発声練習により発音が向上することにおおいに貢献している。もちろん，教師による一連の指示は全て英語である。レッスンを重ねるごとにこの指示は完全に浸透している。

（2）ペアワーク

Model Conversation を二人で口頭練習する。教室の偶数列の生徒が会話の一人，奇数列の生徒が会話のもう一人の役を担うロールプレイを行う。終われば，役を交代して行う。2組代表でクラスの前でロールプレイを行う。その際，手には教科書を持って自分の言うところを見ながら発声している。

（3）今後の展開

発声内容を暗唱させる。演じる要素も入れたい。発声内容をアレンジさせ，自由に対話させる。ロールプレイからスキットへである。

（4）Listening Task

我々教師が好きな学習活動である。文法を教えるだけでなく，リスニングを鍛える編纂内容になっているのがたいへん有り難い。生徒も真剣に聞いている。

ロールプレイの後，もう一度 Model Conversation を聞き，Listening Task の部分の CD を聞かせ，T/F に取り組ませる。解答・解説後，スクリプトを確認させながら，もう一度 CD を聞かせる。正答率も高いので，難易度も極めて妥当である。

（5）Pronunciation

この項目も新学習指導要領を考慮されたものであり，「耳」に関連付けている。イントネーション，リズム，子音等が学べるように工夫されている。CD を聞かせて，問題に取り組む。生徒の取り組みはすこぶるよい。

（6）Function

CD を聞かせ，その後一斉に発声させる。文法内容とは関係のないものもあるが，口語表現を学習するのに極めてよい。本校生の場合，ある外部模試で熟語が弱いと診断結果が出たので，このセクションは有り難い。

（7）ディクテーションシート

Model Conversation から Function 終了後，教師用 CD-ROM からディクテーションシートを活用する。他のセクション同様，2つ以上の技能が連動している言語活動である。Model Conversation から Function を1分間黙読･精読させ，教科書を閉じさせ，CD を聞かせ，(　)内に適語を書き取らせる。終了後，教科書を開けさせ，赤で正解の丸付け･訂正をさせる。生徒は真剣に取り組む。以上は，従来の文法の授業と言うより，オーラルコミュニケーションの授業に近い。これが非常に嬉しい。リスニングの比重が多いのも大きなプラス。センター入試でリスニングが導入されてから定着した今，コミュニケーション英語Ⅰのみならず英語表現Ⅰでもこれだけ聞く活動があるのは『Vision Quest』の強みである。ここまでの教師の指示はオールイングリッシュである。

（8）Grammar

このセクションと次のセクションの Exercises は予習させて授業に臨ませている。重要な板書事項が全て教科書に記載されているため，マーカーを引かせながら理解させている。余裕ができた時間を，口頭英語活動に充てている。各項目を日本語で説明後，Exercises へ行く。全ての Grammar セクション終了後，1分間黙読・暗唱後，CD の後に続いて重要例文をコーラスリーディングさせる。暗唱に力点をおき始める。生徒に負荷がかかり始める。

（9）『Vision Quest 総合英語』

授業中活用することはない。自学自習用である。ただし，授業中に『Vision Quest』に相当する章を言って，家庭で『Vision Quest 総合英語』を熟読するように指導している。教師が必要ないほど詳細である。付属の CD も聞かせている。

（10）Exercises

教科書専用ノートを用意させている。レッスン毎に予習をさせている。全文英文を書かせている。授業中に生徒を指名し，答え合わせをする。その際，生徒に黒板に答えを書かせるか，口頭で答えをシェアさせる。いずれにしろ，答えの検証をし，他の表現の可能性を複数模索する。活発に生徒もこの表現はどうかと質問をする。場合により，ネイティブ講師に即興で答えてもらったり，翌日その回答をクラスでシェアする。

（11）iPad

「使える英語プロジェクト事業」で導入された iPad をフルに活用している。教師用電子データは iPad にも対応できるので非常に役立っている。文法事項の説明は Exercises の生徒用配布プリントの電子データを活用している。スクリーンに授業に使いやすいように加工した電子データを映し出し説明する。聞かせる箇所と書かせる箇所をメリハリつけながら，説明する。生徒の反応もよい。復習に iPad を活用する。Exercises の全英文を暗唱させ，その後，iPad で当該英文を見せ,教師の発声を静聴させた後，Keynote の Out の機能を活用して，英文を消して発声させる。前述したが,相当な負荷が生徒にかかる。

（12）Use it

全ての Exercises 終了後，Use it に取りかかる。教師用 CD-ROM からプリントを用意する。その場でやらせる。自由作文があるのはたいへん有意義である。英語表現Ⅱへの橋渡しのみならず，作文を課す大学の入学試験への準備になる。書いた後，数人を指名し，クラスでシェアさせる。

（13）Expressing

Exercises 後にペアワーク中心で Expressing のセクションの言語活動を行う。教師用 CD-ROM からプリントを用意し，前もって一人でできるところを生徒に完成させる。授業中に生徒に書かせた英語を会話練習させる。現在は書いたものを見ながらのペアワークでロールプレイの形で練習しているが，将来的には暗唱できる形にもっていきたい。ペアワークから，練習相手の幅を広げるグループワークへ拡張する。『Vision Quest』で用意してある STEP 1･STEP 2 の質問を使用して,いろいろなクラスメートとオーラルコミュニケーションを実践。STEP 3 をクラスメートの前で発表。

（14）ワークブック

新学習指導要領で運用面が全面に出たとはいえ，文法知識をきっちり定着させることは不可欠である。運用面を向上させる観点からも，文法を修得させなければならない。教科書の Exercises だけでは練習不足と考え，ワークブックを購入させ，週末課題とし，各レッスンを家庭学習させている。解答チェック後，英文を暗唱させている。定期考査も2割ワークブックから出題している。

（15）小テスト

各レッスン終了後，教師用 CD-ROM にある小テストを活用している。教えた後は必ず評価が必要である。答え合わせを含めて10分以内に収まるので極めて有効である。開始前に 1 分復習させる。その時の生徒の集中力は素晴らしい。生徒自身もその時点での到達度を知ることができ，有益である。平常点の一部にしている。返却の際，小テストに簡単なコメントを書く。生徒はそれを読むのを楽しみにしている。良好なコミュニケーションの場になっている。これが終了して，次のレッスンにいくようにしている。

（16）『基本例文集＋確認問題集』
（『Vision Quest 総合英語』付属の別冊）

『Vision Quest 総合英語』別冊専用ノートを用意させている。自学自習用に使用。各レッスン後「基本例文」を暗唱させ，3度ノートに暗写（暗唱･筆写）させている。「確認問題」を同じノートに全文英文を書かせている。解答チェック。各自赤で丸付け・訂正させる。チェック後，全文暗唱。これを週末課題としている。後期，授業の一部を使って暗唱テストを実施。本校伝統の1年生英語科行事である英語暗唱大会の基礎を作りたい。

（17）フォニックス

今までにない言語活動としてフォニックスを入れている。『Vision Quest』の Appendix の付表18・19の母音･子音を何回かに分けて，コミュニケーション英語Ⅰでネイティブ講師主導で iPad を活用して教えている。『Vision Quest』の母音･子音を基本に，バラエティーを加えて，発音はもとより，iPad 上で作問をしてくれ，生徒は喜んで解答したり，各自の答えを創造したりしている。細かい音の識別から，ディクテーション，リスニング向上につながっている。

3. 今後の言語活動

（1）スピーチ

旧学習指導要領で英語ライティングを教えた経験があるが，本校2年生時に英語科行事にスピーチコンテストがあり，それをライティングの授業中に取り扱った。単文の作成からパラグラフライティングを指導していく。それをスピーチの形で発表できるようにさせる。その際，発音･発声･デリバリー等をきっちり修得させる。

（2）プレゼンテーション

前述にあるが，「使える英語プロジェクト事業」研究指定校として，iPad が導入されている。iPad を用いたティーム・ティーチング，また夏期講習でも iPad を活用した授業を行っている。iPad で教師が授業を提示したり，iPad で生徒が学習活動するだけではなく，iPad を活用しながら，生徒がプレゼンテーションができるように導く。

（3）ディスカッション・ディベート

近年最も求められる技能である。相手の主張をきっちり聞き，自分の主張をはっきり伝える能力を養う。前もってトピックを与えて，それについて段階を経て取り組み，ペアで意見を交換し，最終的にクラスで討論できるようにしたい。

4. 最後に

現在の 1 年生が入学して4か月が経過したところである。一部優秀な成績を残した生徒もいるが，大半はいたって平均である。まだまだ文法修得に時間を割くところが多く，運用面を大きく前面に出す授業には至っていない。しかし，知識が定着次第運用面の割合を多くした授業に移行したい。運用することで知識が定着・深化し，学力がつくようにしていきたい。年一回は公開研究授業の形で多くの先生方とあるべき授業の姿を共有していきたい。

永井 秀夫
ながい　ひでお

三重県伊勢市生まれ。三重大学人文学部文化学科アメリカ文化コース卒業。専門は英語教育。現在大阪府立夕陽丘高等学校勤務。１年生所属。担当教科はコミュニケーション英語Ⅰ，英語表現Ⅰ。研究発表，公開研究授業多数。趣味はスポーツ観戦，映画鑑賞，音楽鑑賞，観劇，読書。

啓林館
http://www.shinko-keirin.co.jp/

〒543-0052 大阪市天王寺区大道 4-3-25 TEL.06-6779-1531 FAX.06-6779-5011
〒113-0023 東京都文京区向丘 2-3-10 TEL.03-3814-2151 FAX.03-3814-2159
〒003-0005 札幌市白石区東札幌 5 条 2-6-1 TEL.011-842-8595 FAX.011-842-8594
〒461-0004 名古屋市東区葵 1-4-34 双栄ビル 2F TEL.052-935-2585 FAX.052-936-4541
〒732-0052 広島市東区光町 1-7-11 広島 CD ビル 5F TEL.082-261-7246 FAX.082-261-5400
〒810-0022 福岡市中央区薬院 1-5-6 ハイヒルズビル 5F TEL.092-725-6677 FAX.092-725-6680

20131008